

國貞系がく

泉鏡花作

一

柳を植ゑた・・・其の柳の一處繁つた中に、
清水の湧く井戸がある・・・大通り四ツ角の
郵便局で、東京から組んで寄越した若干金の爲替を
請取つて、三ツ巻に包んで、ト先づ懷中に及ぶ。

春は過ぎても、初夏の日の長い、五月中旬、午頃
の郵便局は閑なもの。受附にも何の口にも他に立集
ふ人は一人もなかつた。が、爲替は直ぐ手取早くは
受取れなかつた。

取扱ひが如何にも氣長で、

「金額は何ほどですか。差出人は誰でありますか。
貴下が御當人なのですか。」などと問伸のした、
然も際立つて耳につく東京の調子で行る、・・・
其の本人は、受取口から見た處、二十四五の青年で、
羽織は着ずに、小倉の袴で、久留米らしい緋の袴、

白い襯衣を手首で留めた、肥つた腕の、肩の邊まで捲手で何とも以て忙しさうな、其の癖、する事は薩張抄らぬ。態に似合はず悠然と落着濟まして、聊か權高に見える處は、土地の士族の子孫らしい。で、其の尻上りの「ですか」を饒舌つて、時々じろ／＼と下目に見越すのが、田舎漢だと侮るなど言ふ態度の、其れが明かに窓から見透く。郵便局員貴下、御心安かれ、受取人の立田織次も、同國の平民である。

さて、局の石段を下りると、廣々とした四辻に立つた。

「さあ、何處へ行かう。」
何處へでも勝手に行くが可、又何處へも行かないでも可い。此のまゝ、今度の歸省中轉がつてる従姉の家へ歸つても可いが、其處は今しがた出て来たばかり。すぐに取つて返せば、忘れ物でもしたやうに思ふであらう。．．．先祖代々の墓詣は昨日済ますし、久しぶりで見たかつた公園も其の歸りに廻る。約束の會は明日だし、好きなものは晩に食べさせる、と従姉が言つた。差當り何の用もない。何年に

も幾日にも、こんな暢氣な事は覚えぬ。おんぶする
ならしてくれ、で、些と他愛がないほど、のび／＼
とした心地。

氣候は、と言ふと、ほか／＼が通り越した、これ
で赫と日が當ると、日中は早じり／＼と來さうな頃
が、近山曇りに薄りと雲が懸つて、眞綿を日光に干
すやうな、ふつくりと軽い暖かさ。午頃の蔭もさゝ
ぬ柳の葉に、ふは／＼と柔い風が懸る。・・・
其の柳の下を、駈けて通る腕車も見えず、人通りは
ちらほらと、都で言へば朧夜を浮れ出したやうな状
だけれども、此の土地では是でも賑な町の分。城趾
のあたり中空で鳶が鳴く、と丁ど今が春の鰯を焼く
匂がする。

飯を食べに行つても可、一寸珈琲に菓子でも可、
何處か茶店で茶を飲むでも可、別にそれにも及ばぬ。
が、袷に羽織で身は輕し、駒下駄は新し、爲替は
取つたし、まゝよ、若干金か貸しても可い。

「いや、串戯は止して・・・」

然うだ！ 小北の許へ行かねば成らぬ。――と
思ふと、のび／＼した手足が、きり／＼と緊つて、
身體が帽子まで堅く成つた。

何故か四邊が視められる。

恚う、小北と姓を言ふと、學生で、故郷の舊友の
やうであるが、然うでない。是は平吉・・・平
さんと言ふが早解り。織次の亡き親父と同じ夥間の
職人である。

此處からは最う近い。此の柳の通筋を突當りに、
眞蒼な山がある。其れへ向つて二町ばかり、城の大
手を右に見て、左へ折れた、屋並の揃つた町の中ほ
どに、きちんとして暮して居る筈。

其の男を訪ねるに仔細はないが、訪ねて行くのに、
十年越の思出がある、・・・まあ、最う少し秘
して置かう。

さあ、其處へ、と成ると、早や背後から追立てら

れるやうに、それは／＼するのを、成りたけ自分で落
着いて、悠々と歩行き出したが、取つて三十と云ふ
年の、渠の胸の騒ぎやう。さては今の時の暢氣さ
は、此の波が立たうとする用意に、フイと静まつた
海らしい。

此の通は、渠が生れた町とは大分間が離れて居るから、軒を竝べた兩側の家に、別に知己の顔も見えぬ。それでも何かにつけて思出す事はあつた。通りの中はどに、一軒料理屋を兼ねた旅店がある。其處へ東京から新任の縣知事がお乗込とあるに就いて、向つた玄關に段々の幕を打ち水桶に眞新しい柄杓を備へて、恭しく盛砂して、門から新筵を敷詰めてあるのを、向側の軒下に立つて視めた事がある。通り懸りのお百姓は、此の前を過ぎるのに、

「あゝつ、」と云つて腰をのめらして行つ

た。・・・御威勢のほどは、後年地方長官會議の節に上京なされると、電話第何番と言ふのが見得の旅館へ宿つて、葱のニで、東京の町へ出らるゝ御身分とは夢にも思はれない。

また夢のやうだけれども、今見れば麵麩屋に成つた、丁ど其の硝子窓のあるあたりへ、幕を絞つて

「暑くなるよと夜店の中へ、見世ものゝ小屋が掛つた。猿芝居、大蛇、熊、盲目の墨塗」

(此の土俵は星の下に暗かつたが) ー ー 西洋手
品など一廓に、ニ草の花を咲かせた ー ー 表通り
へ目に立つて、蜘蛛男の見世物があつた事を思出す。

額の出た、頭の大きい、鼻のしやくんだ、黄色い
顔が、其の長さ、大人の二倍、やがて一尺、飯櫃形
の天窓にチヨン鬘を載せた、身の丈と云ふほどのも
のはない。頤から爪先の生えたのが、金ぴかの上下
を着た處は、アイ來た、と手品師が箱の中から拇指
で摘み出しさうな中親仁。これが看板で、小屋の正
面に、鼠の嫁入に擔ぎさうな小さな駕籠の中に、く
たりと成つて、ふん／＼と鼻息を荒くする毎に、其
の出額に蚯蚓のやうな横筋を畝らせながら、きよる
／＼と、込合ふ群集を視めて控へる・・・口上
言が其の出番に、

「太夫いの、太夫いの。」と呼ぶと、駕籠の中
で、しやつきりと天窓を掉立て、

「唯今、其れへ。」

とひねこびれた聲を出し、頤をしやくつて衣紋を
造る。其の身動きに、鼬の香を芬とさせて、ひよこ
／＼と行く足取が蜘蛛の巣を渡るやうで、大天窓の

頸窪ぼんのくぼに、附木つけぎほどな腰板こしいたが、ちよこなんと見えたのを憶起おもひおこす。

其それが舞臺ぶたいへ懸かる途端とたんに、ふは／＼と幕まくを落おす。

其その時とき木戸きどに立たつた多勢おほせいの方ほうを見向みむいて、

「うふん。」と云いつて、目めを剥むいて、腦天なうてんから

振下ぶらさがつたやうな、紅あかい舌したをべろりと出だしたのを見みて、

織次おりじは悚然そつとして、雲くもの蒸むす月つきの下したを家うちへ遁歸にげかへつた

事ことがある。

人間にんげんではあるまい。鳥とりか、獸けものか、其それとも矢張やっぱり土

蜘蛛ぐもの類たぐひかと、訪たづねると、．．．．其その頃ころ六十むそば

かりだつた織次おりじの祖母おばあさんが、

「彼あれはの、二股坂まただかの庄屋殿しやうやどのぢや。」といつた。

此この二股坂まただかと言いふのは、山奥やまおくで、可怪あやしい傳説でんせつが少すくな

くない。其それを越こすと隣國りんごくへの近路ちかみちながら、人界じんがいと

境さかひを隔へたつ、自然しぜんのお關所せきしよのやうに土地とちの人は思おもふの

である。

此この邊あたりからは、峰みねの松まつに遮さへきられるから、其その姿すがたは

見えぬ。最つと乾の位置で、町端の方へ退ると、近山の背後に海がありさうな雲を隔て、山の形が歴然と見える。・・・

汽車が通じてから、はじめて歸つたので、停車場を出た所の、故郷は、と一見見ると、石を置いた屋根より、赤く塗つた柱より、先づ其の山を見て、暫時茫然としてゐんだのは、つい二三日前の事であつた。

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

「あの山は？」

「二股ぢや。」と車夫が答へた。――織次は、

此の國に育つたが、用のない町端まで、小兒の時には行かなかつたので、唯名に聞いた、五月晴の空も、暗い、其の山。

爾時は何んの心もなく、件の二股を仰いだが、此處に来て、昔の小屋の前を通ると、あの、蜘蛛大名が庄屋をすると、可怪しく胸に響くのであつた。

まだ、其の蜘蛛大名の一座に、胴の太い、脚の短い、芋蟲が髪を結つて、緋の腰布を捲いたやうな侏儒の婦が、三人ばかり居た。其れが、見世ものゝ踊を濟まして、寝しなに町の湯へ入る時は、風呂の縁へ兩手を掛けて、横に兩脚でドボンと浸る。而して湯の中でぶく／＼と泳ぐと聞いた。

然う言へば湯屋はまだある。けれども、以前見えた、兩眼眞黄色な繪具の光る、巨大な蜈蚣が、赤黒い雲の如く渦を巻いた眞中に、俵藤太が、弓矢を挟んで身構へた暖簾が、たゞ、男、女と上へ割つて、柳湯、と白抜きの懸替つて、門の目印の柳と共に、枝垂れたやうに成つて、折から森閑と風もない。

人通りも殆ど途絶えた。

が、何處ともなく、柳に暗い、湯屋の硝子戸の奥深く、ドブ／＼と、不圖湯の煽つたやうな響が聞える。……

立淀んだ織次の耳には、其れが二股から遠く傳はる、ものゝ笏のやうに聞えた。織次の祖母は、見世物の其の侏儒の婦を教へて、

「あの娘たちは、蜘蛛庄屋にかどはかされて、其の■に成つたいの。」

と昔語りに話して聞かせた所爲であらう。あゝ、薄曇りの空低く、見通しの町は浮上つたやうに見える目に淺いが、故郷の山は深い。

又山と言へば思出す、此の町の賑かな店々の赫と明るい果を、縦筋に暗く劃つた一條の路を隔て、數百の燈火の織目から抜出したやうな薄茫乎として灰色の隈が暗夜に漾ふ、まばらな人立を前に控へて、大手前の土塀の隅に、足代板の高座に乗つた、さいもん語りのデロレン坊主、但し長い頭髪を額に振分け、ごろ／＼と錫を鳴らしつゝ、鹽辛聲して、

「……姫松どのはエ」と、の戀女房が、

瀧夜又姫の山寨に捕へられて、小賊どもの手に松葉
燻となる處――樹の枝へ釣上げられ、後手の肱
を空に、反返る髪を倒に落して、ヒイ／＼と咽んで
泣く。やがて夫の光國が來合はせて助けると云ふの
が、明晩、とあつたが、翌晩も其のまゝで、次第に
姫松の聲が渴れる。

「我が夫いなう、光國どの、助けて給へ。」と
ばかりで、此の武者修業の、足の遅さ。三晩目に、
漸とこさと山の麓へ着いたばかり。

織次は、小兒心にも朝から氣に成つて、蚊帳の中
でも髣髴と蚊燻しの煙が來るから、續けて其の翌晩
も聞きに行つて、汚い弟子が古浴衣の膝切な奴を、
胸の處でだらりとした拳固の矢藏、片手をぬい、と
出し、人の顚をしゃくふやうな手つきで、錢を強請
る、爪の黒い掌へ持つて居たゞけの小遣を載せると、
目を二つたが、黄色い齒でニヤリとして、身體を撫
でようとしたので、衝と極が悪く退つた頸へ、大粒
な雨がポツリと來た。

忽ち大驟雨と成つたので、蒼く成つて駈出して歸つたが、家までは七八町、其の、びしよ濡れさ加減思ふべしで。

あと二夜ばかりは、空模様を見て親たちが出さなかつた。

さて晴れゝば晴れるものかな。磨出した良い月夜に、駒の手綱を切放されたやうに飛出して行つた時は、もうデロレンの高座は、消えたか、と跡もなく、後幕一重引いた、あたりの土堀の破目へ、白々と月が射した。

茫と成つて、辻に立つて、前夜の雨を怨めしく、空を仰ぐ、と咬々として澄渡つて、銀河一帯、近い山の端から玉の橋を町家の屋根へ投げ懸ける。其の上へ、眞白な形で、瑠璃色の透くに薄い黄金の輪郭した、さげ結びの帯の見える、うしろ向きで、雲のやうな女の姿が、すつと立つて、する／＼と月の前を歩行いて消えた。・・・織次は、且つ思ひ且つ歩行いて、丁ど其の辻へ來た。

四

湯屋は郵便局の方へ背後に成つた。

辻の、此の邊で、月の中空に雲を渡る婦の幻を見たと思ふ、屋根の上から、城の大手の森をかけて、一一面にどんよりと曇つた中に、一筋眞白な雲の摩くのは、やがて銀河に成る時節も近い。・・・視むれば、幼い時の其の光景を目前に見るやうでもあるし、又夢らしくもあれば、前世が兎であつた時、木賊の中から、ひよいと覗いた景色かも分らぬ。待て、希くは兎でありたい。二股坂の狸は恐れる。

いや、恚うも、他愛のない事を考へるのも、思出すのも、小北の許へ行くに就けて、人は知らず、自分で氣が咎める己が心を、我とさあらぬ方へ紛らさうとしたのであつた。

さて、此の辻から、以前織次の家のあつた、某町の方へ、大手筋を眞直に折れて、一丁ばかり行つた處に、小北の家がある。

兩側に軒の並んだ町ながら、此の小北の向側だけ、一軒づもりポカリと抜けた、一町内の用心水の水溜で、石畳みは強勢でも、緑晶色の大溝に成つて居る。

向うの溝から鱈によりり、此方の溝から鱈によりり、と饒舌るのは、蓋し此の水溜からはじまつた事であらう、と夏の夜店へ行歸りに、織次は獨りで然う考へたもので。

同一早饒舌りの中に、茶釜雨合羽と言ふのがある。ト恰も此の溝の左角が、合羽屋、は面白い。・・・
・ ・ ・ 　　まだ此の時も、澁紙の暖簾が懸つた。

折から人通りが二三人　　中の一人が、彼の前を行過ぎて、フト見返つて、又ひよい／＼と尻輕に歩行出した時、織次は帽子の庇を下けたが、瞳を屹と、溝の前から、件の小北の店を透かした。

此處に又立留つて、少時猶豫つて居たのである。

木格子の中に硝子戸を入れた店の、仕事の道具は

見透いたが、弟子の前垂も見えず、主人の平吉が半纏も見えぬ。

羽織の袖口兩方が、胸にぐいと上るやうに兩腕を組むと、身體に勢を入れて、つか／＼と足を運んだ。

軒から直ぐに土間へ入つて、横向きに店の戸を開けながら、

「御免なさいよ。」

「はい／＼。」

と軽い返事で、身輕にちよ／＼と茶の間から出た婦は、下膨れの色白で、眞中から鬢を分けた濃い毛の束ね髪、些と煤びたが、人形だちの古風な顔。満更の容色ではないが、紺の筒袖の上被衣を、淺葱の紐で胸高に一寸留めた甲斐々々しい女房ぶり。些と氣になるのは、此家あたりの暮向きでは、之がつい通りの風俗で、誰も怪しみはしないけれども、疊の上を尻端折、前垂で膝を隠したばかりで、湯具を其のまゝの足を、茶の間と店の敷居で留めて、立ち身のなりで口早なもの言ひやう。

「何處からおいで遊ばしたえ、何んの御用で。」
と一向氣のない、空で覺えたやうな口上。言つき
は慇懃ながら、取附き端のない會釋をする。

「私だ、立田だよ、しばらく。」

最う忘れたか、覺えがあらう、と顔を向ける、と
黒目勝でも勢のない、塗つたやうな瞳を流して、凝
と見たが、

「あれ。」

と言ひさま、ぐつたりと膝を支いた。胸を衝と反
らしながら、驚いた風をして、

「何うして貴下。」

とひよいと立つと、端折つた太脛の包ましい見得
もなう、ト身を返して、背後を見せて、つか／＼と
摺足して、奥の方へ駈込みながら、

「もしえ！　もしえ！　一寸………立田様の

織さんが。」

「何、立田さんの。」

「織さんですがね。」

「や、それは。」

と云ふ平吉の聲が臺所で。がた／＼、土間を踏む

下^げ
駄^た
の
音^{おと}。

五

「さあ、お上り遊ばして、まあ、何うして貴下。」
と又店口へ取つて返して、女房は立迎へる。

「ぢや、御免なさい。」

「何うぞ此方へ。」と、大きな聲を出して、満面の笑顔を見せた平吉は、茶の室を越した見通しの奥へ、臺所から駈込んで、幅の廣い前垂で、濡れた手をぐいと拭きつゝ、

「ずつと、ずつと／＼此方へ。」と最う眞中へ座蒲團を持出して、床の間の方へ直しながら、一ツくるりと立身で廻る。

「構つちや可厭だよ。」と衝と茶の間を抜ける時、襖二間の上を渡つて、二階の階子段が緩く架る、拭込んだ大戸棚の前で、入ちがひに成つて、女房は店の方へ、ばた／＼と後退りに退つた。

其の茶の室の長火鉢を挟んで、差むかひに年寄り
が二人居た。あゝ、まだ達者だと見える。火鉢の向

うに踞つて、其の法然天窓が、火の氣の少い灰の上
に冷たさうで、鐵瓶より低い處にしなければ、最
う七十の上にならう。此の女房の母親で、年紀の相
違が五十の上、餘り間があり過ぎるやうだけれども、
此は女房が大勢の娘の中に一番末子である所爲で、
それ、黒のけんちうの羽織を着て、小さな鬚に鼈甲
の耳こじりをちよこんと極めて、手首に輪數珠を掛
けた五十恰好の婆が背後向に坐つたのが、其の総領
の娘である。

不沙汰見舞に来て居たらう。此の婆は、餘所へ嫁
附いて今は産んだ悴にかゝつて居る筈。悴と云ふの
も、煙管、簪、同じ事を業とする。

が、此の婆娘は蟲が好かぬ。何爲か、其の上、幼
い記憶に怨恨があるやうな心持が、一目見ると直ぐ
にむら／＼と起つたから――此の時黄色い、で
つぶりした眉のない顔を上げて、じろりと額で見上
げたのを、織次は屹と唯一目。で、知らぬ顔して奥
へ通つた。

「南無阿彌陀佛。」

と折をりから唸うなるやうに老人としよりが唱となへると、婆娘ばいあむすめは押冠おつかぶせて、

「南無阿彌陀佛。」と生なまわか若い聲こゑを出す。

「さて、何どうも、お珍めづらしいとも、何なんとも早ま

や。

と、平吉へいきちは坐すわりも遣やらず、中腰ちゅうこしでそは／＼。

「お忙いそがしいかね。」と織次おりじは構かまはず、更紗さらさの座ざ

蒲團とんを引寄ひきよせた。

「は／＼、勝手かってに道樂だうらくで忙いそがしいんでしてな、つい暇ひまでもございまするしね、怠なまけ仕事しごとに板前いたまへで庖丁ほうちやうの腕前うでまへを見せて居ゐた所ところでしてねえ。え／＼、織おりさん、此この二三日にちは濱はまで鰯いわしがとれますよ。」と縁えんへはみ出でるくらゐ端近はしぢかに坐すわると一しよ緒そに、其處そこにあつた塵ちりを拾ひろつて、ト首くびを捻ひねつて、土間どまに棄すてた、其その手てをぐいと掴つかんで、指ゆびを揉もみ、

「何時いつ、當こつち地ちへ。」

「二三日にちまへ前まへさ。」

「雑ざつと十四五ねん年に成なりますな。」

「早いものだね。」

「早いにも、織さん、私なんざ最う御覽の通り爺に成りましたよ。是ぢや途中で擦違つたぐらゐでは、一寸お分りに成りますまい。」

「否、些とも變らないね、相かはらず意氣な人

さ。」

「これはしたり！」

と天井抜けに、突出す腕で額を叩いて、

「はつ、恐入つたね。東京仕込のお世辭は強い。

人、可加減に願ひますぜ。」

と前垂を横に刎ねて、肱を突張り、ぴたりと膝に手を支いて向直る。

「何、串戲なものか。」と言ふ時、織次は巻蓑

を火鉢にさして俯向いて莞爾した。面色は凜としながら優しかつた。

「粗末なお茶でございます、直ぐに、あの、入かへますけれど、お一ツ。」

と女房が、茶の室から、半身を摺らして出た。

「これえ、私が事を意氣な男だとお言ひなさるぜ、

御馳走をしなけりや不可んね。
「

「あれ、もし、お膝ひざに。」と、うつかり平吉へいきちの
言いふ事ことも聞落きおとしたらしかつたのが、織次おりじが膝ひざに落おち
た吸殻すひがらの灰はひを弾はじいて、はつとしたやうに瞼まぶたを染そめた。

「さて、何うも更りましては、何んとも申譯のな
い御不沙汰で。否、最う、そりや實に、烏の鳴かぬ
日はあつても、お噂をしない日はありませんが、な
あ、これえ。」

「えゝ。」と言つた女房の顔色の寂しいので、
烏ばかり鳴くのが分る。が、別に織次は噂をされよ
うとも思はなかつた。

平吉は疊み掛け、

「牛は牛づれとか言ふんでえせう。手前が何しま
すにつけて、此も又、學校に縁遠い方だつたもので
えすから、暑さ寒さの御見舞だけと申すのが、書け
ないものには、飛んだ何うも、實印を捺しますより、
事も大層に成ります處から、何とも申譯がございや
せん。」

何しろ、まあ、御緩りなすつて、いづれ今晚は手
前どもへ御一泊下さいませうで。」

と膝をすつと手先で撫でて、取澄ました風をした

のは、其れに極つた、と云ふ體を、仕方で見せたものである。

「串戯ぢやない。」と餘り其の見透いた世辭の
苦々しさに、織次は我知らず打棄るやうに言つた。

些と其の言が激しかつたか、

「え。」と、聞直すやうにしたが、忽ち唇の薄
笑。

「はゝあ、御同伴の奥さんがお待兼ねで。」

「串戯ぢやない。」

と今度は穩かに微笑んで、

「そんなものが有るものかね。」

「そんなものとは？」

「貴下、まだ奥様はお持ちなさりませんの。」

と女房、胸を前へ、手を疊にす。

織次は巻苜を、ぐいと、さし捨てゝ、

「持つもんですか。」

「織さん。」

と平吉は薄く刈揃へた頭を掉つて、目を据ゑた。

「まだ、貴下、そんな事を言つて居ますね。持つものか！　なんて貴下、一生持たないで何うなさる。……また、こりやお亡くなんなすつた父様に代つて、一説法せにやららん。例の晩酌の時に言ふとはじまつて、貴下が殊の外弱らせられたね。あれを一つ遣りやせう。」と片手で小膝をボンと敲き、

「飲みながら可い、召飲りながら聴聞をなさい。これえ、何を、お銚子を早く。」

「唯、最う爛けてござりえす。」
と女房が腰を浮かす、其の裾端折で。

織次は、酔つた勢で、とも思ふ事があつたので、黙つて居た。

「ぬたをの……今、私が搦鉢に拵へて置いた、あれを、鉢に入れて、小皿を二つ、可いか、手綺麗に装はないと食へぬ奴さね。……最う不斷、本場で旨いものを食りつけてるから、田舎料理なんぞお口には合はん、何にも入らない、あゝ、入らないとも。」と獨りで極めて、もじつく女

房を臺所へ追立てながら、

「織さん、鯛のぬただ、こりや御存じの通り、他國にはない味です。これえ、早くしなよ。」

あゝ、しばらく。座に其の鯛の臭氣のない内、言はねば成らぬ事がある……

「あの、平さん。」

と織次は若々しいもの言ひした。

「此家に何だね、僕ン許のを買つて貰つた、錦繪があつたつけね。」

「へい、錦繪。」と、さも年久しい昔を見るやうに、瞳を凝と上へあげる。

「内で困つて、……今でも貧乏は同一だ

が。」

と織次は屹と腕を拱んだ。

「私が學校で要る教科書が買へなかつたので、親仁が思切つて、阿母の記念の錦繪を、古本屋に賣つたのを、平さんが買戻して、藏つといてくれた。其の繪の事だよ。」

時雨の雲の暗い晩、寂しい水菜で夕餉が済む、と
箸も下に置かぬ前から、織次は何しても持たねばな
らない、と言つて強請つた。新撰物理書と云ふ四冊
ものゝ黒表紙。これがなければ學校へ通はれぬと言
ふのではない。科目は教師が黒板に書いて教授する
のを、筆記帳へ書取つて、事は足りたのであるが、
皆が持つてるから欲しくて成らぬ。定價が其のとき金
八十錢と、覚えて居る。

七

親父は其の晩、一合の酒も飲まないで、燈火の赤黒い、火屋の龜裂に紙を貼った、笠の煤けた洋燈の下に、膳を引いた跡を、直ぐ長火鉢の向うの細工場に立ちもせず、袖に繼のあたつた、黒のごろの半襟の破れた、干草色の半纏の片手を懐に、膝を立て、其れへ頬杖ついて、面長な思案顔を重さうに支へて黙然。

一寸取着端がないから、

「だつて、欲いんだもの。」と言ひ棄てに、ちよこ／＼と板の間を傳つて、だゞツ廣い、寒い臺所へ行く、と向うの隅に、霜が見える・・・祖母さんが頭巾もなしの眞白な小さなおばこで、皿小鉢を、がち／＼と冷い音で洗つてござる。

「買つとくれよ、よう。」

と聞分けもなく織次が其の袂にぶら下つた。流は高い。走りもとの破れた芥箱の上下を、ちよろ／＼と鼠が走つて、豆洋燈が蜘蛛の巣の中に茫とあ

る・・・

「よう、買つとくれよ、お辨當は梅干で可いからさ。」

祖母は、顔を見て、しばらく黙つて、

「おゝ、何うにかして進ぜよう。」

と洗ひさした茶碗を其のまゝ、前垂で手を拭き／＼、氷のやうな板の間を、店の畳へ引返して、火鉢の前へ、力なげに膝をついて、背後向きに、まだ俯向いたなりの親父を見向いて、

「の、然うさつしやいよ。」

「成程。」

「他の事ではない、あの子も喜ばう。」

「それでは、母親、御苦勞でございます。」

「何んの、お前。」

と納戸へ入つて、戸棚から持出した風呂敷包が、其の錦繪で、國貞の畫が二百餘枚、蟲干の時、雛祭、秋の長夜のをり／＼ごとに、馴染の姉様三千で、下谷の伊達者、深川の婀娜者が澤山居る。

祖母さんは下に置いて、

「一度見さつしやるか。」と親父に言った。

「いや、見ますまい。」
と顔を背向ける。

祖母は解き掛けた結目を、其のまゝ結へて、一寸襟を引合はせた。細い半襟の半纏の袖の下に抱へて、店のはづれを板の間から、土間へ下りようとして、暗い處で、

「可哀やの、姉様たち。私が許を離れてもの、蜘蛛男に買はれさつしやるな、二股坂へ行くまいぞ。」

と小さな聲して言聞かせた。織次は小兒心にも、其の繪を賣つて金子に代へるのである、と思つた。顔馴染の濃い紅、薄紫、雪の膚の姉様たちが、此の暗夜を、すつと門を出る、と偶と寂しく成つた。が、紅、白粉が何んの其の、新撰物理書の黒表紙が、四冊並んで、目の前で、ひよい、と躍つた。

「待つてごさい、織や。」

ごろ／＼と静かな柩戸の音。

臺所を、どんがた／＼、鼠が荒野と駈廻る。

と祖母としよりが軒先のきさきから引返ひきかへして、番傘ばんがさを持つて出直でなほす時とき、

「あのう、臺所だいどころの燈あかりを消けしといてくらつしやいよ、の。」

で、ガタリと門かどの戸とがしまつた。

コトノ、と下駄げたの音おとして、何處どこまで行くぞ、時雨しぐれの脚あしが颯さつと通とほる。あはれ、祖母としよりに導みちびかれて、振袖ふりそでが、詰つめ袖そでが、褌つまを取とつたの、裳もすそを引ひいたの、鼈べつ甲かぶの櫛くしの照てら々くする、銀ぎんの簪かんざしの揺ゆら々くするの、眞ま白つしろな脛はぎも露あらはに、友染いっせんの花はなの幻まほろしめいて、雨具あまぐもなしに、びしやノ、と、跣はだしで田舎あなの、山近やまぢかな町まちの暗夜やみよを辿たどる風情ふぜいが、雨戸あまとの破目やぶれめを朦朧もうろうとして透すいて見みえた。

其それも科くわ學がくの權威けんゐである。物理書ぶつりしよと云いふのを力ちからに、幼をさない眼まなこを眩くらまして、其その美うつくしい姉様あねさまたちを、ぼつたて、ぼつたて、叩たき出だした、黒表紙くろべうしの其その状さまを、後のちに思おもへば鬼おにであらう。

臺所だいどころの燈ともしびは、遙はるかに奥山家おくやまがの孤家ひとつやの如ごとくに點ともれて居ある。

ト其その壁かへの上うへを窓まどから覗のぞいて、風かぜにも雨あめにも、ば
さノ、と髪かみを揺ゆつて、團扇うちはの骨ほねばかりな顔かほを出だ
す・・・・隣となりの空地あきちの棕櫚しゆろの樹きが、其その夜よは妙めうに
寂しんとして氣勢けはひも聞きこえぬ。

鼠ねずみも寂寞ひっそりと音おとを潛ひそめた。・・・

臺所と、此の上櫃とを隔ての板戸に、地方の習慣で、蘆の簾の掛つたのが、破れる、断れる、其の上、手の届かぬ何年かの煤がたまつて、相馬内裏の古御所めく。

其の蔭に、遠い灯のちらりとするのを背後にして、お納戸色の薄い衣で、ひたと板戸に身を寄せて、今出て行つた祖母の背後影を、凝と見送る状に、いんだ婦がある。

一目見て、幼い織次は此の現世にない姿を見ながら、驚きもせず、しかし、とぼんとして小さく立つた。

其の小兒に振向けた、眞白な氣高い顔が、雪のやうに、颯と消える、ときりきりきりーと臺所を六角に井桁で仕切つた、内井戸の轆轤が鳴つた。が、すぐに、かたりと小皿が響いた。

ながし
流の處ところに、淺黄あなきの手絡てがらが、時ときならず、雲くもから射さす、
濃こい月影つきかげのやうにちら／＼して、黒髪くろかみのおくれ毛けが
はら／＼とかゝる、鼻筋はなすぢのすつと通とほつた横顔よこがほが仄見ほのみ
えて、白しろい拭布ふきんがひらりと動うごいた。

「織坊おりぼう。」

と父ちちが呼よんだ。

「あい。」

ばた／＼と駈出かけだして、其時そのときまで同おなじ處ところに、晝あに描か
いたやうに静ぢやうとして動うごかなかつた草色くさいろの半纏はんてんに搦附からみつ
く。

「あゝ、阿母おつかのやうな返事へんじをする、肖然そつくりだ、今いまの
聲こゑが。」

と膝ひざへ抱だく。胸むねに附くつき、

「臺所だいどころに母様おつかさんが。」

「えゝ！」と父親ちちおやが膝ひざを立てた。

「祖母おばあさんの手傳てつだひして。」

親父おやぢは、其そのまゝ緊乎しつかと抱だいて、

「織坊おりぼう、本ほんを買かつて、何なにを習ならふ。」

「あゝ、物理書ぶつりしよを皆讀みんなよむとね、母様おつかさんの居ゐる處ところが分わか

るつて、先生が然う言つたよ。だから、早く欲しかつたの、臺所に居るんだもの、最う買はなくとも可い。……おいでよ、父上。」と手を引張ると、猶豫ひながら、とぽ／＼と畳に空足を踏んで、板の間へ出た。

其の聲音より、鼠の駈ける音が激しく、棕櫚の骨がばさりと覗いて、其處に、手絡の影もない。

織次はわつと泣出した。

父は立ちながら背を擦つて、わな／＼震へた。

雨の音が颯と高い。

「おゝ、冷え、本降、本降。」

と高調子で門を入つたのが、此處に差向つた此の、平吉の平さんであつた。

傘をがさりと掛けて、提灯をふつと消す、と蠟燭の匂が立つて、家中佛壇の薫がした。

「呀！世話場だね、何うなすつた、父さん。お祖母は、何處へ。」

で、父が一伍一什を話すと――

「立替へませう、可惜ものを。七貫や八貫で手離すには當りやせん。本屋ぢや幾干に買ふか知れないけれど、差當り、其の物理書と云ふのを求めなさる、ね、其れだけ此處にあれば可い譯だ、と先づ言つた譯だ。先方の買直がぎり／＼の處なら買戻すとする。．．．高く買つて居たら破談にするだ、ね。何しろ、こゝは一ツ、私に立替へさしてお置きなさい。．．．そら／＼、はじめた／＼、お株が出たぜえ。こんな事に濟まぬも義理もあつたものかねえ、君。」

と太く書生ぶつて、

「だから、氣が濟まないなら、預け給へ。僕に、ね、僕は構はん。構はないけれど、唯立替へさして氣が濟まない、と言ふんなら、其の金子の出来るまで、僕が預かつて置けば可うがせう。さ、其れで極つた。．．．一ツ莞爾としてくれ給へ。君、しかし何んだね、これにつけても、小兒に學問なんぞさせねえが可いぢやないかね。くだらない、最うこれ織公も十一、吹鞆ばた／＼は勤まるだ。二錢三錢の足には成る。ソレ直ぐに鹿尾菜の代が浮いて出よう」と云ふものさ。．．．實の處、僕が小指の姉

なんぞも、此家へ一人二度目妻を世話しようと言つてますがね、お互に此の職人が小兒に本を買つて遣る苦勞をするやうぢや、未を見込んで嫁入がないツさ。ね、祖母が、孫と君の世話をして、此の寒空に水仕事だ。

因果な婆さんやないかい、と姉がいつでも言つてます。「……と爾時言つた。

―― 其の姉と言ふのが、次室の長火鉢の處に來て居る。――

* * * * * 9

九

其處へ、祖母が歸つて來たが、何んにも言はず、平吉に挨拶もせぬ先に、

「さあ」

と言つて、本を出す。

織次は飛んで獅子の座へ直つた勢。上から新撰に飛付く、と突のめつたやうに成つて見た。黒表紙には綾があつて、艶があつて、眞黒な胡蝶の天鵝絨の羽のやうに美しく・・・一枚開くと、きら／＼と字が光つて、細流のやうに動いて、何がなしに、言ひやうのない強い薫が芬として、目と口に浸込んで、中に描いた器械の圖などは、ぶツしり鐵の楯のやうに洋燈の前に顯れ出でて、繪の硝子が燦と光つた。

さて、祖母の話では、古本屋は、あの錦繪を五十錢から直を付け出して、しまひに七十五錢よりは出せぬと言ふ。きなかも其の上はつかぬと斷る。欲しい物理書は八十錢。何でも直ぐに買つて歸つて、孫が喜ぶ顔を見たさに、思案に餘つて、店端に腰を掛けて、時雨に白髪を濡らして居ると、其處の亭主が、それでは婆さん恚うしなよ。此處にそれ、はじめの一冊だけ、一寸表紙に竹箆で折返し跡をつけた、古本の出物がある。定價から五錢引いて、丁どに鍰

を合はせて置く。で、孫に持つて行つて遣るが可い、と捌きを付けた。國貞の畫が雑と二百枚、辛うじて此の四冊の、然も古本と代つたのである。

平吉はいきり出した。何んにも言ふなで、一圓出した。

「織坊、母様の記念だ。お祖母さんと一緒に行つて、今度はお前が、背負つて来い。」

「あい。」と其の四冊を持つて立つと、

「路が悪い、途中で落して汚すと成らぬ、一冊だけ持つて来さつしやい、又抱いて寝るのぢやの。」

と祖母も莞爾して、嫁の記念を取返す、二度目の外出はいそ／＼するのに、手を曳かれて、キチンと小口を揃へて置いた、あと三冊の兄弟を、父の膝許に残しながら、出しながら、臺所を竊と覗くと、灯は棕櫚の葉風に自から消えたと覺しく・・・眞の暗がりにも、最う何んにも見えなかつた。

雨は小止で。

織次は夜道をたゞ、夢中で本の香を嗅いで歩いた。

古本屋は、今日此の平吉の家に來る時通つた、確か、あの湯屋から四五軒手前にあつたと思ふ。四辻へ行く時分に、祖母が破傘をすばめると、蒼く光つて、蓋を拂つたやうに月が出る。山の形は骨ばかり白く澄んで、兎のやうな雲が走る。

織次は偶と幻に見た、夜店の頃の銀河の上の婦を思つて、先刻とぽ／＼と地獄へ追遣られた大勢の姉様は、まさに救はれて其の通り天にのぼる、と心が勇む。

一足先へ駈出して、見覺えた、古本屋の戸へ附着いたが、店も大戸も閉つて居た。寒さは寒し、雨は降つたり、町は寂として何處にも灯の影は見えぬ。

「最う寝たかの。」

と祖母がせか／＼ござつて、

「御許さい、御許さい。」

と遠慮らしく店頭を叩く。

天窓の上でガツタリ音して、

「何んぢや。」

と言ふ太い聲。箱のやうな仕切戸から、眉の迫つた、頬の膨れた、への字の口して、小鼻の筋から頤へかけて、べたりと薄髯の生えた、四角な顔を出したのは古本屋の亭主で。・・・此の顔と、其の時の口惜さを、織次は如何にしても忘れられぬ。

繪は最う人に賣つた、と言つた。

見知越の仁ならば、知らせて欲しい、其處へ行つて頼みたい、と祖母が言ふと、一寸々々見懸ける男だが、此土地のものではねえの。越後へ行く飛脚だによつて、脚が疾い。今頃は最う二股を半分越したらう、と小窓に頬杖を支いて嘲笑つた。

縁の早い、賣口の美しい別嬪の晝であつた。主が歸つて間も無い、店の燈許へ、あの縮緬着物を散らかして、扱帯も、襟も引さらせて見て居る處へ、三度笠を横つちよで、てしま莫産、脚絆穿、草鞋でさつ／＼と遣つて來た、足の高い大男が通りすがりに、じろりと見て、いきなり價をつけて、づばりと買つ

て、濡らしちやならぬと腰づけに、りんと、上帯を
結び添へて、雨の中をすた／＼と行方知れず
よ。．．．．．

「分つたか、お姿々々。」と言つた。

斷念めかねて、祖母が何かニツ三ツ口を利くと、
 擧句の果が、

「老耄婆め、歸れ。」

と言つて、ゴトンと閉めた。

祖母が、ト目を擦つた歸途。本を持つた織次の手
 は、氷のやうに冷めたかつた。其處で、小さな懐中
 へ小口を半分差込んで、壓へるやうに頤をつけて、
 悄然とすると、辻の浪花節が語つた……

「姫松殿がエ。」

が暗から聞える。――織次は、飛脚に買去ら
 れたと言ふ大勢の姉様が、ぶら／＼と甘干の柿のや
 うに、樹の枝に吊下げられて、上げつ下ろしつ、二
 股坂で苛まれるのを、目のあたりに見るやうに思つ
 た。

と矢張芬とする懐中の物理書が、其の途端に、松
 葉の燻る臭氣がし出した。

固より口實、狐が化けた飛脚でなうて、今時町を
通るものか。足許を見て買倒した、十倍百倍の儲が
惜さに、貉が勝手なことを吐く。引受たり平吉が
で、此の平さんが、古本屋の店へ居直つて、そし
て買戻してくれた錦繪である。

が、其の後、折を見て、父が在世の頃も、其の話
が出たし、織次も後に東京から音信をして、引取ら
う、引取らうと懸合ふけれども、ちるの、びるので
纏まらず、追っかけて迫詰めれば、片音信に成つて
埒が明かぬ。

今日こそ何んでも、と言ふ意氣込みであつた。

却説、其の事を話し出すと、それ、案の定、天井
睨みの上睡りで、ト先づ空惚けて、漸と氣が付いた
顔色で、

「はあ、あの江戸繪かね、十六七年、やがて二昔、
久しいもんでさ、あつたつけかな。」

と聞きも敢へず・・・

「無い筈はないぢやないか、あんなに頼んで置い

たんだから。．．．．」と何故か此の繪が、いはれある、活ける戀人の如く、容易くは我が手に入らない因縁のやうに、寢覺めにも懸念して、此家へ入るのに肩を聳やかしたほど、平吉が恚る態度に、織次は早や燥立ち焦る。

平吉は他處事のやうに仰向いて、

「なあ、これえ。」

と戸棚の前で、膳ごしらへする女房を頭で呼んで、

「知るまいな。忘れたらうよ、な、な、お前も、

あの、江戸繪さ、藏の中にあつたけか。」

「唯、ござりえす、出しますかえ。」と女房は

判然言つた。

「難有う、お琴さん。」

と、はじめて親しげに名を言つて、凝と振りむくと、浪の淺黄の暖簾越に、又颯と顔を赧らめた處は、何うやら、あの錦繪の中の、其の、何の一人かに倂が幽に似通ふ。．．．．

「お一つ。」

と其處へ膳を直して銚子を取つた。變れば變るもので、まだ、七八ツ九ツばかり、母が存生の頃の雛

祭には、緋の毛氈を掛けた桃櫻の壇の前に、小さな
蒔繪の膳に並んで、此の猪口ほどな塗椀で、一緒に
蜆の汁を替へた時は、此の娘が、練物のやうな顔の
ほかは、着くるんだ花の友染で、其の時分から圓い
背を、些と背屈みに坐る癖で、今も其の通りなのが、
恚うまで變つた。

平吉は既う五十の上、女房はまだ二十の上を、二
ツか、多くて三ツであらう。此の姉だつた平吉の前
の家内が死んだあとを、十四五の、まだ鳥も宿らぬ
花が、夜半の嵐に散らされた。はじめ孫とも見えた
のが、やがて娘らしく、妹らしく、恚うした處では
肖しく成つて、女房ぶりも哀に見える。

此も飛脚に攫はれて、平吉の手に捕はれた、一枚
の繪であらう。

いや、何んにつけても、早く、と又屹と居直ると、
女房の返事に、苦い顔して、横睨みをした平吉が、
「だが、何だぜ、これえ、何それ、何、あの貸し
た切に成つてる筈だぜ。催促はするがね・・・
それ、な、これえ。まだ、あのまゝ返つて來ないよ、

然うだよ。あゝ、然うだよ。」

と幾度も一人で合點み、

「えゝ、織さん、いや、何うも、あの江戸繪ですがな、近所合壁、親類中の評判で、平吉が許へ行つたら、大黒柱より江戸繪を見い、と言ふ騒ぎで、來るほどに、集るほどに、丁と片時も落着いて居た驗はがあせん。」と藏の中に、何とやらと言つた、其の口の下……

「手前ぢや、まあ、持物と言つたやうなものゝ、言はゞね、織さん、何んですわえ。それ、貴下から預つて居るも同然な品なんだから、出入れには、自然、指垢、手擦、つい汚れ勝にもなりやせうで、見せぬと言へば喧嘩に成る……弱るの何んの。其處で先づ、貸したやうに、預けたやうに、餘所の藏に秘つてありますわ。處が、それ。」と、これも氣色ばんだ女房の顔を、兀上つた額越に、ト睨つて、

「其の藏持の家には、手前が何でさ、……些と其の錢式の不義理があつて、當分顔の出せない、と云つたやうな譯で、いづれ、取つて來ます。取つ

て来るには取つて來ますが、つい一寸、ソレ錢式の事ですからな。

それに、織さん、近頃ぢや價が出ましたつさ。錦繪は・・・唯た一枚が、雑とあの當時の二百枚だつてね、大事のものです。貴下にも大事のもので、又此方も大事のものでさ。價は惜まぬ、ね、直は惜まぬから手放さないか、と何度も言はれますがね、賣るものですか。そりや賣らない。憚りながら平吉賣らないね。預りものだ、手放して可いものですかい。

けれども、おいそれとは今言つたやうな工合ですから、いづれ、其の何んでさ。ま、ま、めし飲れ、熱い處を。ね、御緩り。さあ、これえ、お焼物がな。え、間抜けな、ぬたばかり。これえ、御酒に尾頭は附物だわ。ぬたばかり、いやぬた／＼とぬたつた婦だ。へ／＼／＼、鯛を焼きな、氣は心よ、な、鯛をよ。

と何か言ひたさうに、膝で、もぢ／＼して、平吉の額をぬすみ見る女房の様は、湯船へ横飛びにざぶ

んと入る、あの見世物の婦らしい。これも平吉に買はれた爲に、姿まで變つたのであらう。

坐り直つて、

「あなたえ。」

と怨めしさうな、情ない顔をする。ぎよろりと目を剥き、險な面で、

「これえ。」

と言つた。

が、鰯の催促をしたやうで。

「今、焼いとるんや。」

と隣室の茶の室で、女房の、其の、上の姉が皺びた聲。

「なんまいだ。」

と婆が唱へる。……これがー「姫松

殿がえ。」と耳を貫く。……稱名の中から、

じり／＼と脂肪の煮える響がして、腥いのが、むら

／＼と來た。

此の臭氣が、偶と、あの黒表紙に肖然だと思つた。

と其れならぬ、姉様が、山賊の手に松葉燻しの、

亂るゝ、揺めく、黒髪までが目前にちらつく。

織次は激く云つた。

「平吉、金子でつく話はつけよう。鯛は待て。」

【完】